

るように、『プロスロギオン』は未だ terra incognita に留まっている。それは、この書で提起された問題こそ、パルメニデス以来人間の思索が取り組んできたもの、思惟と存在の問題であるからに他ならない。著者はそれを「アンセルムスの思索と文化の脈絡の中」でなんとか明らかにしようとする。この試みは正当であろうし、それによって本書は『プロスロギオン』のみならず、その他の作品、アンセルムスの思想の持つアウグスティヌスの伝統、彼の属する文化についても有益な入門となっている。最後になったが、誤字、脱字が非常に多いのは残念なことである。

上智大学中世思想研究所編集
古代キリスト教の教育思想：教育思想史Ⅱ

昭和59年，東洋館出版社，462頁。

宮本久雄

本書は、教育思想史四巻中の第二巻を占め、旧・新約教育思想からギリシア・ラテン教父教育思想までを包括する豊饒にして多彩な論文集である。しかもこの種の著作としては日本で最初の労作であり、執筆者も現代日本の学的最前線で活躍しておられる顔ぶればかりであり、従って本書の古典思想研究の水準は単なる『教育思想史』の枠を突破した神学的香りの高いものになっていると言えるであろう。本書の意図を示すと思われる序言においても「今日、教育はその意味を根底から問い直されている」（1頁）と訴えられ、従って問いは「人間とは本来何なのか、自由な決断を通して人間は何になり得るのか、また、真の善に照らして何であるべきなのか」（同）という哲学・神学の中心的課題をめぐるものとされているのである。

実際に「古代キリスト教の教育思想」が対決し、思索のよき土壌としたギリシア哲学並びに旧約的思想において教育への問いは世界と人間の根柢への問いそのものであったとさえいえるであろう。ギリシア哲学はその教養の理想（*enkyklios paideia*）の背後に善のイデアへの人間の帰郷という問いを人間の思索の歴史に提示して

いた事はプラトンの『国家』第6巻第7巻を俟つまでもなく明らかであろう。そしてこの問いを共同生活シムヨシヤと共同研究を通してになった教育の場がアカデメイアであった(廣川洋一著、『プラトンの学園アカデメイア』、岩波書店)。他方旧約的のヒブル世界においても、それが契約という形であれ何であれ、神との交わり、主の現存と共なる歩みが問題であったといえよう。家族、聖所での祭りやトーラー研究を通じての教育は神の想起ズィクカールン(zikkārōn)にむけられ、神の想起ズィクカールンとは神の現存に生きることに外ならなかったのである(関根正雄著、『古代イスラエルの思想家』、講談社)。

こうした哲学乃至神学の二大潮流、二大文化、宗教伝承の流れに生れ、イエス・キリストに出会った人々(使徒、教父たち)は、どのようにイエス・キリストを見定め、自己を発見し、根拠に立ち返り、そしてキリスト教とよばれるに相応しいムカウ独自の教育を産みおとしていったのであろうか? このような問いに対し、本書の論文は各々独立した体裁をとりつつも、全体として見事に調和して、各自の問題意識と視点のうちでこたえてくれているように思われる。そのこたえの「要約」・「内容紹介」など安易にできるものではないが、今は敢えて聖書学的研究(第一～第四論文)とギリシア・ラテン教父研究(第五論文以降)を通して浮彫りにされてくる筋道を追跡してみたい。

「旧約聖書」(本田献一)においては、教育の根底に神(の救い)の体験とこの体験の追体験がひそむ事が示され、『ヨブ記』における如き「神の像」たる自由な自律の人間こそが神に出会いうるとされている。「イエス時代のユダヤ教育」(関谷定夫)はイスラエルのベート・ハッセフェル(初等学校)の歴史的・制度的実態を分析し教育の理想が、神の聖への与かりであってそれがトーラー研究を通じての倫理的生活の完全性に求められることが示されている。このラビ的背景において「福音書」(三好迪)ではトーラー・預言者などがイエスの人格自身に収斂し、彼に従う事が父たる神へのみちミチとしての教育の成立であるとされ、「パウロス」(山内一郎)こそ、その生の実践と福音宣教を通じ、唯一の教師、キリストに倣ふすがたを示したのであった。時代は教父時代に入り「エイレナイオスとグノーシス主義」(荒井献)ではエイレナイオスがヘレニズム思想の残滓をひきずりつつも、グノーシス主義に対し、キリスト受肉を主軸とする「再アタラフアライオニス統合」論において、人間の靈的成長史としての教育論を展開したとされる。これとは別にギリシア的教養の

真只中においてギリシア哲学の思惟方法と概念を用いてキリストの生を再考察する教父達の流れが生じた事が述べられる。ユスティノスやクレメンスはロゴスたるキリストのうちにすべての人間の真理認識が完成される事を洞察し「ユスティノスとアレクサンドレイアのクレメンス」(久山宗彦)、オリゲネスは聖書に基づき、生ける人格神のうちにギリシア的教養を統合し、歴史的宇宙論的な神の paideia 思想を大成した「オリゲネス」(P. ネメシュギ)。以上のアレクサンドレイアの学統に対しアンティオケイア学派の学統に属すクリュソストモスはイエスの受肉の謙遜のうちに人が神を知る根拠である愛を観想し、この謙遜の倣ひをその金口で説き、典礼に結晶化させた「クリュソストモス」(谷隆一郎)。他面アレクサンドレイアの学統はカッパドキアに開花しナジアンゾスのグレゴリオスと共に三位一体の奥義への観想は深まり、その友パシレイオスはプロチノスを注解して、ギリシア的認識者の立場を脱し、礼拝者たる立場を鮮明にしつつ、愛を根幹とする修^{アスケーシス}道的共同体的探究の道を拓いたとされる。同じカッパドキアの学統の大成者たるニュッサのグレゴリオスは更にキリストの受肉と三位一体論を深化し、神のうちに、人間理解を「神の像」理解として主題化した。「神の像」成立とはギリシア的教養乃至人間的立場を無として、人が神のうちにキリストを通して産み出されるという道を迎える事以外ではなかった「パシレイオス」(水垣渉)、「ニュッサのグレゴリオス」(山村敬)。以上のギリシア教父の系列からキリスト教神学研究はラテン教父へと転ぜられ、その教育の根幹「Vulgata」聖書を完成したヒエロニムスに主題は移るが、彼の *Conversio* の方向はただひたすら受肉のキリスト以外ではなかった。それは「キケロのもの」「ギリシア的教養」から「キリストのもの」に転換する逆転であって「*Virginitas*・処女性」とは花婿キリストとの一致をあらわす新しい人間の在り方として語られている「ヒエロニムス」(中澤宜夫)。カッパドキアのみならずアウグスティヌスの三位一体論の熟成はヒプルの超越神論の彼方にまで神理解の射程をのばしていった。そして新プラトン主義的想起説を教師と弟子の間に介在し両者を照らす真の教師キリストの内的照明 (*illuminatio*) として定位したのはアウグスティヌスであった。この照明説によるキリスト教師論の確立は、理性の原理としての権威 (*authoritas*)、知の原理としての信を暴き出す道行きであったともいえる。それ故人間の教師は、キリストたる教師と「聴く者」との間に在って自ら^{しも}僕として仕える以外

の何者でもない「アウグスティヌスの教育論」(茂泉昭男)。それ故又「教師とは…自らが没落することを望むこと切なるほど、それだけまた人類に希望するところ大きな存在である」と語られる由縁である「アウグスティヌスの教師論」(今道友信)。このように教育とは神の受肉の謙遜の倣いによる新しい創造(reformatio)として確定されてくる。他方、ラテン世界にアリストテレス論理学を導入したボエティウスは、三位一体論を深めると共に、自然科学的の四科(算術、音楽理論、幾何学、天文学)を用いて自然神学の学的説明を開始したのであるが、カッシオドルスはそうした傾向を聖書研究の立場から欠落させたといわれる「ボエティウスとカッシオドルス」(野町啓)。こうしたラテン教父のキリストの倣いは、「祈りかつ働け」という具体的実践を血肉となすベネディクトゥス修道院制に結実し、修道院は霊・肉のバランスをとりつつ、キリストの塾として以後西欧的教育の中核的位置を占めてゆく事になった「ベネディクトゥスの会則」(坂口昂吉)。それより時代が下り、東方から西方にもたらされた擬ディオニュシオスの否定神学的著作は修道院制がいかに世俗の塵にまみれても、神秘的闇に住む神への道の灯として輝き続けるのである「ディオニュシオス・アレオパギテース」(大森正樹)。

大略以上の古代キリスト教の教育思想の流れは簡にして要をえた仕方で「古代キリスト教の教育思想」(K.リーゼンフーバー・酒井一郎訳)に概説されており読者の一助となろう。

そこに浮彫にされてくる諸使徒・教父の思索は、ギリシア的知の探求とヒブリス的超越神論に対し、イエス・キリスト(受肉の神)のすがたとその根拠たる三位一体の秘義を示す事にあつたといえよう。それ故キリスト教教育とは三位一体を範とするコイノーニア(共同性)のうちにイミタティオ・クリスティとして実践され、その具体的場はアウグスティヌスのいう神の国をやどす教会であり、ベネディクトゥスに淵源する修道院であり、秘跡たる家庭などに求められたのであろうか。

ともあれ我々が教育を思索・実践する日本の状況は使徒・教父が生き、苦闘した古代教会の状況に全く相似しているように思われる。その意味においても使徒教父の思索と生の歩みを多数の碩学の力をえて論文集という形態の下に総括的に表現・集成した本書は、まことに記念碑的作品であり、教育を生き、思索される読者にとって大いに途の指針となりうるであろう。

他方、このような聖書学、教父学の歴史研究の進展と共に、現代日本において「教父を読む」という事はどのような営為なのであるか、という問いは、また別の課題として聖書・教父研究に従事する者にとって残されている。それは神のエクスタシスとしてゴルゴタの丘に磔刑を受難したあの神が依然、「汝、我を誰と思えるか」という問いをなげかけ、人間の自由な応えをまっている事態に変わりはないからである。

末筆ながら、本巻はすぐれた諸論文の外に、巻末付録として「地図」、「年表」、「基本文献表」、「事項索引」、「人名・地名索引」などを含み、実に懇切丁寧な構成にしてあり、編集者の目配りが窺える次第である。本巻が古代中世哲学・神学研究にとってよき賦活材たることを願ってやまない。